

おなか^が重い、とメリー^が言い出したのは彼女^が恐竜を見たという日の翌日^で、もちろん私はメリー^の腹痛と恐竜との関連性^{なんて}その時は全くわからなかったのだ。わかるわけ^{がない}。

／

「だから、今晚のオールドアダムはやめとくわ」

喫茶アップルは哲学の道の半ばにある。哲学の道……比叡山の山裾やますそ、琵琶湖疎水びわこそすいに沿って南は南禅寺から北は銀閣の慈照寺までを繋ぐ遊歩道。その道のりの真ん中あたり、法然寺前の四つ辻の角にリングの描かれた看板が掲げられている。店内はカウンターとテーブルをあわせて十席たらず、屋外テラスに二人がけのテーブルがふたつのこぢんまりとした店構えて、地元民や学生、観光客にも愛され続けている。

「え、大丈夫？」

「大丈夫か大丈夫じゃないかで言えば……大丈夫だけど」

メリーの手元……赤と白のタータンチェックのテーブルクロスの上に合成桜ソメイヨシノの黄色い葉が落ちてきて、私はとっさにその落ちてきたほうを目で追う。テラス席から見える遊歩道の植え込みはどれも秋の色に染まっていて、琵琶湖疎水の川面が花筏はないかだならぬ紅葉筏で飾られるのももうすぐだろう。視線を戻すと、メリーは暗赤色のストールの間から気だるげに手を出して、その落ち葉をさっと払い落とす。

「お腹が重かったら気分も重くなっちゃったっていうか。少なくともお酒……旧酒は止め
ていたほうがいいかなって」

「もしかして、今日ケーキを食べないのもそのせい？」

私の席の前にはコーヒーとこの店おススメのアップルパイがあり、メリーの前には紅茶
のカップだけがつつましやかに置かれている。

「それは……」とメリーが口ごもるので、「もしかして重くなったのはおなかだけじゃなく
て体重も」と言おうとして、言い切る前にチョップをお見舞いされる。

「ところで、重いつて……どういう風に？」

「あら、蓮子ってそういうカウンセリングもできたんだっけ？」

「医療は専門外よ、もちろん」

そうじゃなくて、と私は言う。腹部の異常は、つまり内臓の異常だ。素人の聞きかじり
知識だけれど、そういうところの異常は自覚症状のない場合が多い。自覚症状があるとい
うことは、もうそれほどに悪くなっているのかもしれない。

「つまり、蓮子なりに心配してくれてるってことは分かったわ」

「そりゃ心配するわよ。身体を壊して臓器取っ替えなんてことになったらお金もばかにな
らないんだし」

メリーはクスクスと笑って、紅茶をひとくち飲む。「蓮子が払うわけでもないのに」

「こちとらセレブでもインド人でもないからね」

いくら前世紀のようにクローンや合成といった技術が未熟な時代に比べて格段にリーズナブルになったとはいっても、学生の経済力から考えたら痛い出費であることには変わらない。そんなことが目の前で起こるのは気分的にもよろしいものではないのだ。

「というわけだから、ちゃんと病院にいくのよ」

「正直、病院はもうこりこりなんだけど……」

メリーの眉間にあからさまにしわが寄る。あの、トリフネ遺跡で受けた傷の治療は相当懲りたらしい……そりゃあ、ちょっとしたケガの治療のつもりが信州のサナトリウムに隔離される羽目になる、なんて経験したら私だって懲りる。多少は。たぶん。

「メリーが元気でいてくれないとこっちだって困るんだから。不安の種は小さいうちに潰しておくの……ただの風邪とかならそれでいいんだし」

「驚いた。蓮子のことだからツバつけとけば治る、くらいのこと言うかと思った」

「私がそんなエビデンスのないこと言うと思う？」

「ツバについて研究してエビデンスを自作するくらいのことならやると思う」

アハハ、と私たちは笑う。私はぬるくなってしまったブレンドコーヒーに口をつける。

「どちらにしても、秘封倶楽部の活動もちゃんと元気になってからね」

「ネタはあるんだ？」

もちろん、と言って私は携帯端末^{モバイル}を取り出し、用意していた資料を見せる。

「……旅のしおり……」

「そう。京都お地蔵さん巡りツアーよ」

「六地蔵巡礼みたいなの？」

「六地蔵どころか、京都じゅうのお地蔵さんを見て回るのよ」

へえー……とメリーは何とも言いがたい表情で言う。「数、多くない？」

「そりゃ京都だから」

「しかも歩くんだ」

「巡礼だからね。そのためにもメリーには元気になってもらわなくちゃ」

「元気さの基準を蓮子に合わせないで欲しいんだけどなあ……」

メリーの体力は元気な時でさえ箱入りお嬢様のそれなので、弱っている時に無理はさせられない。

「今日のオールドアダムは、私ひとりで行こうかな。メリーの昨日の話、してもいいよね」

「ええ」とメリーは頷いて、紅茶の最後の一口を飲む。「ごめんね」

「いいってば。それよりちゃんと治すのよ」

私も残りのアップルパイを片付けてしまい、その場は解散になる。哲学の道を北……一乗寺方面に歩いてゆくメリーの姿は足取りも案外しっかりしていて、このまま何もなければいいけれど、と思う。私はといえば、夜までの空いた時間をどう潰すか考え、ひとまず大学の研究室に足を向ける……つまり、何も考えずに足の動くに任せる。倶楽部活動のない日はいつだってそうするように。昼下がりの遊歩道には講義を終えた学生や観光客が押し寄せ始めていて、私はそれをかき分けてゆく。

メリーの見た恐竜の話というのは、こうだ。

こんな夢を見たの、とおなじみの決まり文句からメリーは語り始める。メリーが立っていたのは夜の町で、おそらくは京都だろう、とのことだった。

「おそらく、っていうのは？」

と私は聞く。メリーいわく、いつも歩いている大学の周りや四条界限といった場所と雰囲気は似通っていて、でもその場所に来たことはそれまでにないような、あいまいな印象を持ったということだった。

まあ夢の話だから、そこら辺がぼんやりしているのは当たり前だけれどね、とメリーは笑う。いつも見ている風景に似たものを私が夢の中で勝手に作っただけかも、と。

「それで、その町の中に恐竜がいたの？ 一世紀前の怪獣映画みたいな……」

ちょっと違うかな、とメリーは私の認識を訂正する。もう少し私の話を聞いてよ、とメリーは続ける。

メリーはその町を歩き出した。秋の深まった夜の空気はひえびえとしていて、一定距離ごとに点在する街灯のあかりもどこかうそ寒く感じられた。道の両わきにはずっと住宅が並んでいて、けれど人の活動する気配もなく、人々の寝静まった時間なのだろうと察せられた。

「もしくは、ほんとうに人がいなかったとか」

かもしれないわね、とメリーは言う。どのみち夢だからもう検証のしようがないけれど。とにかくメリーは歩いた。とれだけ歩いてても似たような景色が続き、とれだけ時間がたったのか分からなくなったところに、メリーは橋の上に立っていた。

「橋があるってことは、川があったわけだ」

ええ、とメリーは言う。川といっても鴨川や桂川のように大きな流れではなく、宇治川のような急流でもなく、ましてや貴船なんかの山の溪流のようなものでもない。コンクリートで固められた川岸のあいだを水がずうっと流れているというような、町の用水路と呼んだ方がしっくりくるようなものだった。当然橋も渡月橋とか四条大橋とかそんな良いものではなくて、欄干はコンクリートと鉄パイプ、路面は昔ながらのアスファルトで固められた、道路の延長といったところ。

「夢なんだからもっとファンタジックな演出があっても良いのにね」

メリーは頷く。夢の中のメリーとしてもその橋に特に何か感動したということも無く、た

だ、橋のほとりの四つ辻で、なんとなく川沿いの道に進路を変えた。その道も結局それまでと同じく、街灯がぼつりぼつりとあって、平屋や、アパート、コンビニといった建物たちが大人しく整列している場所だった。けれど、だんだんメリーにはこの場所を歩かなければいけないという確信が沸いていたという。この先に、目的地があるような予感が宿ったかのように、メリーの足はどこかを目指していた。

そこで、見たのよ。とメリーは言う。

「つまり……恐竜を？」

そう。

歩いているうち、何かの拍子に、メリーは川に目を向けたという。かすかなせせらぎが耳に届く以外なにごともない、ごくごく平穏な流れの中に、メリーは違和感を見つけた。川の中心に、小島のような盛り上がりが見えた……と思ったら、まばたきをした次の瞬間には見当たらなくなっている。気のせいか、と思うとまたヌツと川の中心が盛り上がった。見間違いではない。大きめの鯉コイか何か？と思いきりメリーは目を凝らす。夜闇の中でかすかな街灯の光をてらてらと反射するそれは、川の中をうねりながら浮いたり沈んだりしている。それは、遠目での目測でも二メートルくらいはあるように見えたという。いくら大きい鯉でもありえない大きさ。

「ピラルクーくらいあるわね」

でもそこは少なくともピラルクーのいるアマゾン川ではなかったのだ。それに、その浮島はじきにピラルクーよりも大きくなっていく……浮島に見えたのは、その背中の、ほんの一部だった。メリーは見た。大きな、ぎよろりとした目玉が月明かりに光るのを。頭から背にかけて、それはその巨体をあらわにしていく。ぬらぬらと濡れる肌はウロコのようなものに覆われていて、下流に見えたしっぽの先までは五メートルを上回っている。それはゆっくりと大きなあぎとを開ける。するどい歯がびっしりと並んだそれを誇るように……あくびをするような緩慢さで、頭を持ち上げ、巨大な、壊れた弦楽器コントラバスをガチャガチャとむやみに引っ掻くような、低く不気味なうなり声をあげて、夜の空気をびりびりと震わせる。街路樹が戦たたかぎ、街の空気が重さを増したようになって、メリーはその場に釘付けになる。それに満足したように目玉をぎよろりと光らせ、そうして、それはクジラのジャンプのような動作で、水面から大きく体を持ち上げてその輪郭を月夜に浮かび上がらせ、大きな水しぶきを上げて川底へ沈んでいった。メリーはその水しぶきが眼前に襲い掛かってくるのに、反射的に両腕で顔を覆う。

そうして、腕を恐る恐る下げて、目に入ったのは自宅の天井だったという。つまり、目が覚めたのだ。

バー・オールドアダムがあるのは、意外といえれば意外、京都繁華街の中心のような場所だ。といっても、最もにぎわう四条河原町、寺町や京極といった界限からはややはずれたところで、市場の有名な錦小路通の北側、三条よりは南側の、中心街にぼっかりとあいた穴場のような界限。ここは京都によくある長屋ふうの建物の中にエスニック・バーや隠れ家的なカフェなんかが入在していて、裏町的な独特の雰囲気がある。オールドアダムのある建物も、一階はベトナム料理の店、二階はドイツの本格クラフトビアを再現したというビアハウスで、そのベトナム料理屋のわきにひっそりと地下へ続く階段がある。「Old Adam」と古めかしい飾り字で書かれた立て看板を横目に見ながら、物好きたちはその階段を下りてこの場所に至るのだった。

私が話し終えると、店のあちらこちらから拍手が起こった。ほの暗い店内には老若男女統一感のないさまざまな人たちがいて、席の半分強を埋めている。この店の客に共有していることはただ一つ、科学世紀から失われつつある「不思議」を愛好しているということだ。「ご清聴ありがとうございます。僭越ながら、ドクター・レイテンシーの代役を務めさせて頂きます